子ども向けマス・メディアに描かれたジェンダー
―テレビおよび絵本の分析―

藤田　由美子

Gender in Mass Media for Children:
An Analysis of Television and Books

Yumiko FUJITA

Abstract

The purpose of this paper is to examine gender in the context of mass media for young children, and to consider the role of media in gender formation during early childhood. For this study, 35 TV programs for children televised in the fall of 2000 and the spring of 2001 in the Miyazaki area are recorded, and 112 picture books for children were collected. The process of the analysis was as follows: (1) The proportion of female to male characters, their roles in the programs, and their occupations were analyzed; (2) For some programs and stories, the characteristics of the character, and the description of gender dichotomy were analyzed.

The study found asymmetrical gender portrayals. Both for TV programs and for books, male characters appeared more than female ones. Female characters appeared in supportive roles more than male did. For the adult characters, gender division of labor was described. From qualitative analysis, the female characters and the male character were described as counterparts and stereotypically. From the analysis, the dichotomous and asymmetrical descriptions of gender were revealed. The findings are discussed in relation to previous findings, and in terms of gender formation during early childhood.

Key words : Children, Gender, Mass Media, Content Analysis, Asymmetry

キーワード: 子ども，ジェンダー，マス・メディア，内容分析，非対称性

問題設定

本稿の目的は，子ども向けメディアに描かれたジェンダーについて，テレビと絵本の内容分析を中心に検討することにある。

フェミニズムを背景にした女性学の興隆は，既存の人文・社会科学に大きな影響を与えた。社会的・文化的に形成される性としてのジェンダー概念は，キー概念であった。ジェンダーの視点に立った研究は，「ジェンダー研究」として蓄積しつつある。

ジェンダー研究は，教育社会学研究にも多大な影響を与え，数多くの研究成果をもたらした。まず，教育を通して，女性と男性が異なる地位に配分されていることが暴かれた。その後，女性と男性が社会的・文化的に異なるものとしてつくられ，異なった社会的役割へ配分されるメカニズムが明らかにされた。社会的・文化的に異な

九州保健福祉大学社会福祉学部　社会福祉計画学科　宮崎県延岡市吉野町1714-1　〒882-8508
Department of social welfare planning, School of social welfare, Kyushu University of Health and Welfare
1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka, Miyazaki 882-8508 JAPAN

る存在へと方向づける「ジェンダーへの社会化」あるいは「ジェンダー形成」のプロセスは，人生の早い段階に始まっている。

本稿は，科学研究費基盤研究（C）(2)『幼児期における「ジェンダーへの社会化」に関する実証的研究』の一部である。この研究は，子どもが《女性》あるいは《男性》となる過程においては単に受動的な存在ではなく行為者でもあるという視点に立ち，メディア，仲間集団，保護者，教師，といった幼児期におけるジェンダー形成の諸要因について実証的な検討を試みたものである。

本稿では，これらのうちメディアに注目して検討を行った結果について報告する。本研究の視点より，メディアは子どもに一方的に情報提示をするエージェントとしてよりは，子どもが社会的行為を通して構築するジェンダーに関する情報の一部として捉えられる。

子どもが日常的によく接するメディアとして，テレビ番組と絵本をとりあげた。なぜならば，子どもは一日のうち無視できない時間をテレビ視聴に費やしており，家庭や幼稚園・保育園においても絵本に接する機会が非常に多いからである。

本稿では，まず，メディアの内容分析研究の動向を概観し，到達点をあきらかにする。続いて，2000年度の子ども向けメディアに描かれたジェンダーの量的分析および質的分析を行う。最後に，分析結果について，われわれの社会におけるジェンダーの問題と関連づけ，若干の考察を行う。

内容分析研究の背景には，受け手がメディアからどのような影響を受けるかという視点がある。これまでの研究においても，たとえば暴力描写の影響やステレオタイプ描写の影響などについて盛んに論じられ，実験的研究が行われてきた。ジェンダーあるいは性役割に関する研究も同様で，メディア接触による子どもの性役割行動あるいは性役割観への影響について，数多くの実験的研究が行われてきた[1]。内容分析結果の解釈およびメディアと子どもとの関係を考えるうえで，上記の問題設定の意義および限界について考える必要がある。

子ども向けメディアに描かれたジェンダーへの注目

1　なぜメディアなのか

子ども向けメディアは，子どもたちの生活にとって重要な位置を占めている。子どもたちがテレビや絵本に触れる時間は，一日のうちで無視できない割合を占めている。筆者が2001年3月に行った幼稚園・保育園での保護者調査によると，子どもは1日のうち1.70時間テレビを視聴し，絵本は1か月に8.28冊読んでいた（藤田　2002，31頁）。また，子どもたちは，遊びの中でしばしばメディアについての情報交換をしている（藤田　前掲書，27頁）。

これまでにも，マス・メディア研究において，政治的イデオロギーの偏りや民族的ステレオタイプなど，描写におけるさまざまな偏りが問題とされてきた。それは，たとえば民族に関するステレオタイプに対する批判が公民権運動の高まりと期を一にするなど，時代背景を持っている。メディアにおける性役割問題が注目されたのは，第二波フェミニズムの影響による女性学の興隆をひとつの背景としている。

2　内容分析研究の動向

メディアに描かれた性役割あるいはジェンダーに関する内容分析研究は，欧米では1960年代以降，日本でも1970年代以降，さまざまなメディアについておこなわれてきた。その結果，女性の登場が少ないこと，性別役割分業あるいは性格描写にステレオタイプがみられること，男性による支配がみられること，などが明らかにされてきた。

（1）女性の不可視性とステレオタイプ

1）女性の不可視性

メディアの内容分析研究において，キャラクターの男女比の偏りが注目されるようになったのは，1960年代以降である。たとえば，欧米でのテレビにあらわれた性役割の内容分析研究において，おおよそ女性対男性の比率は3：7である（Durkin 1985）。また，日本におけるアニメ番組の分析でも，女性の登場は4割に過ぎない（藤田 1996）。

また，教科書においても，女性の登場が少ない。国語教科書のキャラクターのうち女性は30％弱である。大人キャラクターに限ればさらに少なくその割合は20％にも満たない（倉田 1987，伊東ほか 1991）。

2）役割描写の傾向

多くのメディア分析において，「男は仕事，女は家庭」といういわゆる「性別役割分業」に関する描写が顕著であると報告されている。また，男性キャラクターの多くは職業を持ち，その職種は多様である一方，女性は職業を持たず，教師，看護婦，などといった，「女性の職業」とみられる職業についている者が多い。

また，性格描写にも，性役割が描かれていることが指摘された。すなわち，女性は「かわいい」「やさしい」人物として描かれることが多く，男性は，「強い」「たくまし

い」と描かれることが多い。

さらに，キャラクターが作品中で果たす役割を分析した研究は，ジェンダーによる役割分業を指摘している。すなわち，男性は能動的な役割，女性は受動的な役割である，という役割描写の違いがみられる。

（2）変化はみられるか

内容分析研究において，しばしば「(過去のメディアに比べて）男女平等的になったか」ということが問題になる。年代別比較を行った研究は，過去のメディアに比べて新しいメディアの方がステレオタイプ的描写は少ない，という結果を得ている。

一方，根本的な変化はあまりしていない，という議論もある。たとえば，行動のパターンの描写については変化がみられない，というアレンらの指摘がある（Allen et al. 1993)。

3　研究視点の変容

（1）内容分析：質への注目

内容分析研究でとられていた伝統的手法は，量的分析であった。すなわち，ある内容が，メディアにおいてどの程度あらわれているのかを，たとえばページ数，キーワードの登場頻度，登場人物の数，などを数えることにより傾向を示す手法である。

ジェンダーあるいは性役割に関する内容分析研究においても，キャラクターのジェンダー比，職業や役割描写を量的に数える分析が伝統的に多かった。ストーリー展開のパターンについて量的傾向を明らかにする研究も多く行われてきた。たとえば，諸橋（1993）は，レディスコミックのストーリー展開のパターン分析より，女性と男性の「対」が成就するパターンが圧倒的に多いことを明らかにした。

しかし，量的傾向だけでは，テキストの文脈との関連を考察することができない。このため，質的研究が行われるようになった。

近年では，メディアに含まれる会話データを用いて，「差異はつくられる」という視点にたった研究が行われつつある。たとえば，ディスコース分析や会話分析の手法を用いて，メディアでの会話を分析する手法である。

メディア内容におけるジェンダー・ディスコース分析では，ジェンダーに関するイデオロギーが構築されていることが明らかにされている。大原は，テレビ番組の相談場面の分析を通して，相談者の発言に対する出演者の「解釈」と「問題のすり替え」によりジェンダー・イデオロギーが再構築されると論じた（大原　2002)。

（2）「影響モデル」批判

メディア研究の前提として，受け手がメディア内容の影響を受ける，という「影響モデル」がある。それは，バンデューラなどの社会的学習理論を理論的背景とするものである（Bandura 1977；訳書1979)。

しかし，影響モデルという問題設定に限界があることはすでに多くの研究者によって指摘されている。その第一は実験研究そのものの限界に対する議論である。ドゥーキンはテレビの性役割と子どもの発達に関する研究動向を概観したのち，社会学習理論を背景とした影響モデルの限界を指摘した（Durkin 1985)。また，井上は，実験研究では短期的直接的影響を測定するに過ぎないと批判し，回想記分析の可能性を提示しつつ長期的・蓄積的影響を検討することの必要性を論じた（井上　1990)。また，発達心理学の分野でも，たとえば，認知発達理論の立場より，「性の一貫性（gender constancy)」が発達するに従い，選択的にテレビメディアを視聴するという議論がある（Slaby & Frey 1975など)。また，非日常的な実験室での研究への批判を踏まえ，家庭でのビデオ記録データを用いてメディア視聴行動の傾向を検討する調査が行われている（Luecke-Aleksa et al. 1995)。

新たなモデルの提示もなされてきた。たとえば，受容理論においては，視聴者（聴取者，読者）は，メディアの「受け手」ではなく「読み手」であると捉えられる（佐藤　1990)。

フェミニストによる研究においても，読み手の解釈に注目したものがある。デビーズは，フェミニスト的な童話を読み聞かせしたとき，子どもは自らのジェンダー観に基づき読み取りをしていることを明らかにした（Davies 1989)。

（3）ジェンダー・カテゴリーの自明性への批判

セックスとジェンダーをめぐる議論において，生物学的な性＝セックスが基礎となって社会的・文化的な性＝ジェンダーがつくられるという図式が自明視されてきた。しかし，ポスト構造主義フェミニズムはこの因果関係を逆転させた。すなわち，ジェンダーによってセックスがつくられる，と論じたのである[2]。この問いは，〈女〉－〈男〉というジェンダーの二分法そのものの自明性を問い直した点で，非常に重要である。

しかし，メディアとジェンダーの問題を取り扱った多くの研究において，《女性》《男性》という二分法的なジェンダー・カテゴリーの自明性は依然として問われないままである。

田中は，この点についてジェンダー構築主義の視点よ

り批判的に考察した。彼女は,「女性像」「男性像」の歪みを問い直し「あるべき女性像／男性像」を求めてきたこと自体が問題であると論じている（田中　1999)。

4　本研究における内容分析への視座

本研究で行った内容分析は，子どものジェンダー形成に関する変数のひとつとしてメディアを位置づけ，2000年度の子ども向けメディアの全体的な傾向を捉えることに主眼を置いたものである。したがって，量的傾向の分析に主眼が置かれている。

たしかに，量的分析の限界は否定できない。キャラクターを女／男とカテゴリー分類して分析すること自体，仮に直接言及しなかったとしても，結局は,「女（あるいは男）はこうあるべきだ」という「別の」モデル提示となるおそれがある。その結果，既存の（二分法的かつ非対称な）ジェンダー・イデオロギーの構築に加担してしまうことになるだろう。「男は仕事，女は家庭」などのような既存のジェンダー知からの「解放」を企図しつつも，二分法的なジェンダーを自明視している点において同じ陥穽におちる，という構築主義からの批判は，当然起こりうる。

しかし，われわれは，二分法を前提としたジェンダー知からいまだ逃れたことがない。また，現在もなお「性による公平さ（gender equity)」は重要なテーマである。上記の批判があることを踏まえつつ，二分法的カテゴリーを前提としたうえで女性，あるいは男性はどのように描かれているかを問題視することは，今なお有効であると考える。

子ども向けメディア内容のなかのジェンダー

—2000年度データの分析より—

1　データおよび分析方法

（1）データ

分析データとして，テレビと絵本をとりあげた。

まず，テレビについては，2000年9，10月および2001年3，4月に宮崎県地域で放映された子ども向け番組，のべ35番組（うちアニメ番組20，特撮番組2，教育番組13）を分析対象とした[3]。

これらの番組は，ビデオに録画して記録した。同じ時間帯に放送される番組について，教育番組は3月に，アニメ番組は9月～10月に録画を行った。

絵本については，1963年から1999年までに刊行され，2000年度に刊行されていた112冊，121作品を対象にした。選定に当たっては，刊行年度を幅広くとるよう留意した[4]。なお，初版刊行年の内訳は，表1に示したとおりである。

表1　絵本の刊行年代

	-1969	70-79	80-89	90-99	合計
実数	4	22	22	64	112
%	3.6	19.6	19.6	57.1	100.0

（2）分析方法

1）量的分析

各作品のキャラクターについて，数量的処理を行うため，データベースを作成した。その手順は次のとおりである。

まず，下記の項目について，対象とした作品のキャラクターの特徴を数量化し，カードにデータとして記録した。この作業には学生7名の協力を得た。

a. ジェンダー（女性／男性／不明という3カテゴリーによる）
b. 職業
c. 作品中の役割
　a) 主人公／主人公以外の者については，主人公との関係
　b) 屋内での役割と屋外での役割（大人のみ）
d. 特徴（形容詞を3つ以内で記入）[5]

これらのデータは，表計算ソフトによりコンピュータに入力された。

なお，性別判定において,「女性」「男性」「不明」のカテゴリーを設けた。明確にジェンダーを表象していないキャラクターを無理やり「女性」「男性」のどちらかに分類すること自体,「ジェンダーの二分法」を強化することであるからである。

2）物語展開の質的分析

本研究では，一定期間に放送・刊行された両メディアについての量的傾向を分析することに主眼が置かれた。しかし，キャラクターの特徴を量的に把握するだけではなく文脈との関連より考える必要がある。したがって，質的分析の必要性がある。

本稿では，全作品を対象とするのではなく，主たるキャラクターが子どもであるいくつかの作品を抽出し，物語展開およびキャラクターの行動，役割にあらわれたジェンダーに関する描写を析出した。

2　「女性の不可視性」の持続

まず，キャラクターのジェンダー構成について，検討

を行った。メディアにおけるジェンダー分析において，「女性キャラクターの少なさ」は重要な論点のひとつであるからである。表2に，キャラクターのジェンダー構成を示した。

表2　キャラクターのジェンダー構成

		女性	男性	不明	合計	女性率(%)
テレビ	度数	405	707	154	1266	36.4
	%	32.0	55.8	12.2	100.0	
絵本	度数	130	270	38	438	32.5
	%	29.7	61.6	8.7	100.0	

この表より，キャラクターに占める女性の割合が少ないことがわかる。女性対男性比を求めた結果，テレビでは4：6（女性率[6] 36.4%），絵本では3：7（同32.5%）であった。絵本はテレビに比べて「女性の不可視性」が顕著であった。

子どもキャラクターと大人キャラクターに分けてそれぞれ性別構成を比較した（表3）。その結果，テレビも絵本も，子どものキャラクターについては，大人のキャラクターに比べて女性の割合が少ない傾向であった。テレビ番組においては，大人も子どもも，女性は30%前後登場するに過ぎない。一方，絵本については，大人キャラクターは比較的女性が多く，子どもキャラクターは男性が多い傾向にあった。

表3　子ども登場人物と大人登場人物のジェンダー構成

	テレビ　***			絵本　***		
	子ども	大人	全体	子ども	大人	全体
女性	34.2	35.9	35.0	26.4	37.3	30.9
男性	52.4	62.3	56.7	63.6	59.0	61.8
不明	13.4	1.8	8.3	9.9	3.6	7.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
実数	584	451	1035	242	166	408

注　表中の記号は，カイ2乗検定の結果を示す（以下同様）
*** p.<.001　** p.<.01　* p.<.05

つづいて，絵本について，刊行年ごとにキャラクターの性別構成を行った（表4）。その結果，1980年代に出版された絵本における女性と男性の比はおよそ4:6である。一方，1970年代以前と1990年代以降に出版された絵本については3:7であった。

結局，子ども向けメディアのキャラクターには，女性が少ない。そして，その傾向は，大人よりも子どもで顕著であった。

表4　絵本刊行年代ごとのジェンダー構成

	-1969	70-79	80-89	90-99	全体
女性	29.2	24.4	36.7	27.8	29.7
男性	54.2	67.1	57.5	62.7	61.6
不明	16.7	8.5	5.8	9.4	8.7
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
実数	24	82	120	212	438
女:男比(%)	35.0	26.7	38.9	30.7	32.5

3　役割の非対称性の持続

番組内でのキャラクターの役割を，ジェンダー別に検討した。その結果を，表5に示した。

テレビ番組では，主人公328名のうち，202名が男性であった。キャラクター全体における割合は61.6%であり，男女計に対する割合でも70.4%を占めていた。一方，主人公以外の役割をみると，主人公の恋人・配偶者や家族の半数は女性で占められていた。

絵本においても，同様の傾向を示していた。主人公は男性の割合が高い傾向にあった。主人公132名のうち92名（69.7%）が男性である。女性の主人公は全体の21.2%（28名）に過ぎない。一方，女性は，主人公の恋人・配偶者，その他家族・親族のキャラクターの過半数を超える。

全体的に，主人公以外のキャラクターにおいて，女性の割合は相対的に高い。一方，主人公については，女性の割合がさらに少ない傾向にあった（女性率：テレビ29.6%，絵本23.3%）。

表5　作品中の役割とジェンダー

	テレビ　***							絵本　***						
	主人公	恋人・配偶者	他家族	親友・仲間	その他人	不明	全体	主人公	恋人・配偶者	他家族	親友・仲間	その他人	不明	全体
女性	25.9	53.3	48.8	33.5	24.9	41.8	32.0	21.2	100.0	54.7	24.8	31.3	23.5	29.7
男性	61.6	46.7	51.2	53.6	57.8	50.6	55.9	69.7	0.0	45.3	71.3	60.0	51.0	61.9
不明	12.5	0.0	0.0	13.0	17.3	7.6	12.1	9.1	0.0	0.0	4.0	8.8	25.5	8.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
実数	328	15	86	571	185	79	1264	132	3	64	101	80	51	431

続いて，主人公以外のキャラクターについて，主人公に対する関係を検討した（表6）。テレビ番組においては，主人公を援助する，あるいは敵対するキャラクターは男性の割合が高い。一方，女性キャラクターは，主人公の家族あるいは恋人として登場する頻度が，男性の場合よりもやや高い。また，傍観者の役割を担うことが比較的多い。

絵本作品において，主人公を援助するキャラクターは，女性の割合が高い。主人公に敵対するキャラクターは，男性の割合が相対的に高い。

テレビ番組においても絵本においても，男性は主導的・積極的な役割を果たしていた。一方，女性は補助的・周辺的な役割を果たしていた。以上の分析より，テレビおよび絵本に登場するキャラクターの非対称なジェンダー関係が浮かび上がってきたといえる。

4　大人の職業および活動の場

まず，大人キャラクターの職業を検討したところ，下記の三点が明らかになった。

第一に，何らかの職業を持つ女性の割合が少ない。テレビ番組において，何らかの職業を持つ女性はのべ82名，男性はのべ190名登場した。つまり，何らかの身分を持つ女性の割合は30.1％であり，男性（69.9％）の半分にも満たない。同様に，絵本に登場する職業を持つ女性は6名，男性は31名であり，著しく偏りがある。

第二に，女性は，男性に比べ，職業の種類が少ない傾向であった。テレビ番組では，女性の職業は27種類，男性のそれは51種類であった。絵本に登場する女性の職業は4種類，男性の職業は17種類であった。

第三に，職種の分布に偏りがみられた。テレビ番組において，女性でもっとも多いのは主婦で，34.1%を占める。続いて警察官[7]，食堂の従業員と続く。男性では教師がもっとも多く，続いて警察官，サラリーマンと続く。絵本においては，女性は教師が2名，医学博士，店員であった。また，「～のお母さん」といった，他者との関係での呼称が，女性キャラクターの64.4%を占めていた。男性は，自営業，医師・獣医が多い。

つづいて，テレビ番組の大人キャラクターについて，家庭の内外における役割描写の有無を検討した。その結果，家庭内で活動する大人キャラクターは，女性の割合がやや高い。女性は家事をする者がもっとも多く，男性はその他の役割を担うことがもっとも多かった。一方，戸外では，男女とも仕事をしている者の割合が最も高い。しかし，女性の登場は著しく少なく，戸外で活動している大人キャラクターの30％弱を占めるに過ぎない。

絵本において，家庭における役割を担うキャラクターでは，女性よりも男性の割合が若干高い。女性の多くが家事を担い，男性キャラクターの多くがその他の役割を担っていた。

また，戸外における役割を検討したところ，女性の登

表6　主人公との関係とジェンダー

	テレビ　***						絵本　***					
	援助	敵対	傍観	その他	不明	全体	援助	敵対	傍観	その他	不明	全体
女性	30.6	19.2	**44.9**	46.4	46.9	33.9	**43.3**	19.4	38.6	6.9	26.5	33.2
男性	**57.1**	**55.8**	46.1	51.8	45.3	53.9	53.7	**69.4**	54.5	82.8	55.1	58.9
不明	12.3	25.0	9.0	1.8	7.8	12.2	3.0	11.1	6.8	10.3	18.4	7.9
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
実数	552	104	89	56	128	929	134	36	44	29	49	292

表7　大人キャラクターの家事・仕事担当状況とジェンダー

	テレビ					絵本				
	何もしない	家事	仕事	家事+仕事	全体	何もしない	家事	仕事	家事+仕事	全体
女性	34.7	**89.8**	21.4	11.1	35.9	28.6	**80.5**	11.1	**66.7**	37.3
男性	62.2	10.2	**77.5**	**88.9**	62.3	**64.9**	19.5	**86.7**	33.3	59.0
不明	3.1	0.0	1.1	0.0	1.8	6.5	0.0	2.2	0.0	3.6
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
実数	196	59	187	9	451	77	41	45	3	166

場が著しく少ない（全体の29.4%）。女性はその他の役割を担う者の割合が高く，男性は仕事を持つ者の割合が高い。

最後に，家事と仕事の担当状況を検討した。テレビ番組の大人キャラクター453名における家庭での家事と戸外での仕事の担当状況について，クロス分析を行った。その結果を，表7に示した。この表における顕著な傾向は，家事役割と仕事役割について，男女比に著しい偏りがみられたことである。家事役割に従事しているキャラクターは，女性が89.8%，男性が10.2%であった。一方，仕事に従事しているキャラクターは，女性が21.4%，男性が77.5%であった。

絵本についても，家事をしているキャラクターは，女性が約8割を占める。仕事をしているキャラクターのうち86.7%が男性であった。

以上より，大人キャラクターの家庭と戸外への登場，そして役割描写の分析を通して，「男は仕事，女は家庭」といういわゆる「伝統的」性別役割分業観が，テレビ番組でも絵本でも，大人キャラクターにおいて表現されていることが推測できる。

ただし，ごく一部ではあるが，ジェンダーの交差がみいだされた。たとえば，女性の警察官，大工，医師が登場していた。また，男性が家事をする場面もわずかにみられた。

5　女の子と男の子の物語　―質的分析より―

上記の量的傾向は，あくまでもキャラクターの特徴についての分析結果である。量的傾向の背景にある文脈をたどる必要性がある。

（1）女の子と男の子の対比的描写

子ども向けメディアにおいては，しばしば，「しっかり者」「まじめ」な女の子と，「ドジ」「愚か」な男の子が対比的に描かれている。

たとえば，「とっとこハム太郎」では，女の子が「まじめ」な発言をしていたのに対し，男の子が周りを笑わせたり「ズッコケ」させたりする発言をしていた。また，「忍たま乱太郎」では，主人公を含む「落ちこぼれ忍者」三人組と，優秀な「くの一」三人組が対比的に描かれている。

また，絵本『なぞなぞの好きな女の子』の主人公の女の子は，自分を食べてやろうと声をかけてきたおおかみ（男性）を，なぞなぞで負かす。

しっかり者の女の子とドジな男の子。この関係性を見る限り，過去の内容分析においてしばしば指摘される，「男が強く女が弱い」というジェンダー関係が逆転しているかのように見える。

しかし，しっかり者の女の子は主人公であることは少ない（『なぞなぞの好きな女の子』などを除いて）。彼女たちは，主人公であるドジな男の子をサポートする役割を持つ。それは，量的分析結果における女性キャラクターが主人公であることが少なく，支持的役割を果たすことが多い傾向とも関連しているのではないか。

（2）成長物語にみるジェンダー

主人公たちは，しばしば何らかの発達課題を持っている存在として描かれている。それについては，女の子も男の子もあまり違いはない。しかしその描かれ方を詳細にみると，ジェンダーによる非対称性が浮かび上がる。

1）男の子の場合　―「弱虫」「ドジ」の克服が課題―

男の子の主人公たちの中に，「ドジ」で「間抜け」で「おっちょこちょい」で「ひょうきん」なキャラクターとして描かれていた者がいる。かれらは物語を通して成長していく者もあれば，成長しないままにあっけらかんと生きていくものもある。

絵本『よわむしハリー』の主人公は，よわむしで仲間からもからかわれていた。ある日両親とサーカスを見に行った主人公は，ハプニングで猛獣の檻の中に入り込んだり，走っている馬に乗っかったりしてしまう。しかし，それ以来，彼はこわいもの知らずになった。

この物語では，「よわむし」のためにからかいの対象となっている場面や，ハプニングを通して「こわいもの知らず」になったハリーが仲間から賞賛される場面が描かれている。

2）女の子の場合　―「家庭性」の要求と「対」願望―

女の子は，たとえば「忍たま乱太郎」のくの一三人組あるいは『なぞなぞの好きな女の子』の主人公のように，すでに成熟した存在として描かれていることが多い。しかし，女の子を主人公とした作品における成長の過程をみると，男の子の成長物語とは異なった変化を遂げていくことが描かれている。

『おジャ魔女どれみ#』の主人公，春風どれみは魔女見習いである。魔女界で赤ちゃん（ハナちゃん）の誕生を目撃したため，1年間育ての親となることになった。育ての親である間赤ちゃんにふりかかる困難を乗り越え，ついに魔女になることを認められる。

「どれみ」シリーズにおいては，主人公たちは「魔女」になるために「赤ちゃんの世話」「お菓子作り」「雑貨作

り」といった試練を課される。また，そこに登場する男の子たちはかっこよくてやさしく，主人公たちのあこがれの対象となる者もいる[8]。

かつて筆者は，テレビ・アニメ番組の分析によって，女の子が主人公の番組では「かっこいい」男の子にあこがれ「思いを伝えたい」と願うパターンがみられることを明らかにした。また，彼女たちは「かわいらしさ」や「家事」をすることが求められていた（藤田　1996）。今回分析対象とした「どれみ」シリーズにおいても，同様の描写がみられた。

6　結果の要約

（1）キャラクターの登場について。テレビにおける女：男比は4：6，絵本におけるそれは3：7であった。絵本においては，刊行年代による違い，大人と子どもによる違いがみられた。

（2）作品中の役割描写について。男性が主導的な役割，女性が援助的・周辺的な役割を担っている点は，両メディアに共通していた。絵本では援助する役割は女性が担い，一方テレビでは援助する男性が多くみられたなど，メディアによる違いも若干みられた。

（3）大人キャラクターの家庭や戸外での役割について。女性は戸外での役割は担わない傾向があった。家事と仕事の担当状況の分析より，「男は仕事，女は家庭」という「伝統的」性別役割分業が明確に描かれていた。

（4）質的分析より，女の子と男の子が対比的に描かれていることが明らかになった。また，成長物語を通して，女の子と男の子で求められるものが異なることが明らかになった。

議論

1　内容分析結果より　－二分法的かつ非対称なジェンダーの持続－

今回の量的分析を中心とした内容分析を通して，ジェンダー描写の持続性が浮き彫りになった。まず，女性は男性より少ない登場であり，主人公としての登場はさらに少ない傾向であった。これは，「女性の不可視性」が持続していることを示している。また，大人キャラクターの仕事についての描写より，「男は仕事，女は家庭」の性別役割分業観が浮き彫りにされていた。さらに，女性と男性の関係性は，「非対称的」であった。すなわち，「補助的・『表出的』役割としての女」対「主導的・『道具的』役割としての男」という図式が浮かび上がっていた。

1990年代前半までに行われたテレビの内容分析研究を概観したところ，多くの研究において，女性と男性の比はおよそ3：7であった。筆者は，以前，テレビ・アニメ番組の分析より，キャラクターの女性対男性比は4：6という結果を得た（藤田　1996）。対象番組の種類を増やした本分析においても，同様の結果であった。

女性対男性の比率が3：7から4：6に変化したことの解釈としては，二通り考えられる。第一に，3：7から4：6へと変化したのは，「男女平等のあらわれ」であるという解釈である。第二に，4：6であること自体，「不平等が改善されていないことのあらわれ」という解釈である。今回の結果をどう解釈するか。

そこで，役割描写で得られた結果を概観すると，依然として，ジェンダーによる非対称性が残っている。主人公は男性が多く担い，「男は仕事，女は家庭」という性別役割分業が描かれていた。とりわけ，性別役割分業は，これまでにも問題として取り上げられてきたにもかかわらず，本分析で対象としたメディアにも，明確にあらわれていた。

職業的役割だけではない。作品中の役割や相互作用においても，「男性が主で女性が従」という関係性が見い出された。そして，女の子キャラクターに「家庭性」が描かれていることは，女性が社会においてどの位置につくべきであるか，に関するメッセージが発せられている。

もちろん，画一的な描写ばかりというわけではない。料理をする男あるいは仕事をする女といった描写のように，ある種の多様性はみられた。しかし，この多様性は，関係性についてのイデオロギーが維持される中での「公的領域」での多様性であることに留意する必要があるだろう。

結局，子ども向けメディアは，二分法的かつ非対称なジェンダー・イデオロギーを提示している。そのイデオロギーは，とりわけ関係性のレベルにおいては強固に堅持されていると捉えられる。

2　メディアが子どもにもたらすもの

それでは，メディア内容と子どもの間にはどのような関係があるだろうか。筆者による幼稚園あるいは保育園の観察結果（藤田　2002など）を踏まえ，若干の考察を行う。

子どもたちの日々の生活にはメディア情報が入り込んでいる。彼ら・彼女らはキャラクター商品を身につけ，幼稚園や保育園といった共同生活の場にも持ち込む。そして，遊びのテーマ，あるいは遊び中の会話においてはメディアに関する内容がしばしば登場していた。園がキャラクターのおもちゃやシールの持ち込みを禁止して

いたとしても，子どもたちはおかまいなしにその禁を軽々と破ってみせるのである。

子どもたちは，自分の性別に「ふさわしい」メディア内容を選択しているようであった。もし「ふさわしくない」メディア内容を選択していたら，「男（女）のくせに」というように仲間から評価され，非難される。

古典的な「影響モデル」によれば，子どもたちはメディア内容を受け止め，それに影響されると考えられる。しかし，幼児においてすら，自らの性別に「ふさわしい」メディアが何であるかを選択し，他者に対して自らの解釈を押し付けることができるのである。

デビーズは，カウンター・ステレオタイプ的な内容のメディアを子どもに示しても，かれらが自らのジェンダー観にふさわしい解釈をすることを明らかにした(Davies 1989)。このように，子どもたちは，メディア内容をただ受け売りするだけではなく，自らその内容を解釈して意味づけているのである。すなわち，大人ばかりでなく子どもも，メディアの「読み手」となりうるのである。

近年，子どもたちが社会との相互作用を通してジェンダーに関する価値を構築することが明らかにされている(Francis 1998など)。メディアは，子どもたちが二分法的なジェンダーを構築するためのひとつの「材料」として，ジェンダー・イデオロギーを提示していると考えることができる。

むすび

本稿では，子どものジェンダー形成に寄与するもののひとつとして，メディアをとりあげた。その内容を分析し，子どものジェンダー形成に果たす役割について考察した。本稿を締めくくるにあたり，教育実践との関連について若干述べておきたい。

子ども向けメディアにおいては，二分法的かつ非対称なジェンダー描写がみられた。しかし，子ども達はメディアの情報を単純に受け売りしているわけではない。彼ら・彼女らは，メディアの情報を，ジェンダーに関するさまざまなメッセージのひとつとして選択的に受け取っているに過ぎない。

とはいえ，子どものジェンダー形成において，その生活世界に入り込んでいるメディアの役割を過小評価するわけにはいかないだろう。

ステレオタイプ的な描写を排除したメディアの提示が有効な解決法ではないことは明らかである。また，かつてみられた「暴力」や「性」の描写を子どもから遠ざけた動き[9]と同様に，ジェンダー・バイアスに満ちたメディアを子どもから遠ざけることは無意味である。

ジェンダーについて問い直す教育実践のなかで，しばしばメディアが活用されている（たとえばTaylor 1987など）。むしろ，メディアに描かれたジェンダーを見つめ，それを通して浮かび上がる社会について，子どもとともに問い直す実践が必要なのではないだろうか。

付記

本稿は，平成12年度～平成13年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「幼児期における『ジェンダー』への社会化」に関する実証的研究」（課題番号12610296）で得られたデータにもとづき執筆したものである。

注

⑴欧米におけるテレビに描かれた性役割に関する研究動向にについては，Durkin(1985)を参照した。

⑵ポスト構造主義フェミニズムにおける議論については，主に上野(1995)によるレビューを参照した。

⑶なお，録画のさいに生じたデータの欠損等により，各作品の放映回数はまちまちとなった。もっとも多い放送回数は30回，もっとも少ない放送回数は１回であった。

⑷図書の選定にあたっては，紀伊国屋書店ホームページにおける特集記事，および出版社の目録，などを参考にした。

⑸今回の分析では使用しなかった。

⑹女性率とは、女性数／(女性数＋男性数)＊100として求めたもの。

⑺警察官が２位になったのは，データとした番組の中に警察が舞台のものがあったためであると考えられる。

⑻物語展開については,『おジャ魔女どれみどっか～ん！』公式ホームページを参照した。

⑼たとえば，1980年代末から1990年代はじめにかけての「『有害』コミック問題」がその例である。青少年の「健全育成」推進派によって，コミックの性描写規制にあたって「性の商品化」言説が利用された側面がある（藤田　2001)。

参考文献

①Allen, A. M. et al. 1993, "Changes in Sex-Role Stereotyping in Caldecott Medal Award Picture Books 1938-1988," *Journal of Research in Childhood Education,* Vol. 7, No. 2, pp.67-73

②Bandura, A. 1977, *Social Learning Theory,* Prentice-Hall (原野広太郎 監訳 1979,『社会的学習理論－人間理解と教育の基礎－』金子書房)

③Davies, B. 1989, *Frogs and Snails and Feminist Tales: Preschool Children and Gender,* Allen & Unwin

④Durkin, K. 1985, *Television, Sex Roles and Children: A Developmental Social Psychological Account,* Open University Press

⑤藤田由美子　1996,「テレビ・アニメ番組にあらわれた女性像・男性像の分析　―ステレオタイプ的な描写の検討を中心に―」『子ども社会研究』2号，33-46頁

⑥藤田由美子　2001,「性の商品化とメディア」江川，高橋，葉養，望月編『教育キーワード137（第9版)』時事通信社，250-251頁

⑦藤田由美子　2002,『幼児期における「ジェンダーへの社会化」に関する実証的研究』平成12年度～平成13年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書

⑧井上輝子　1990,「メディアの性役割情報と子どもの自我形成　―大学生の自己回想記分析―」『女性学研究』第1号，42-62頁

⑨井上輝子，女性雑誌研究会　1989,『女性雑誌を解読する』垣内出版

⑩石川弘義，滝島英男（編）　2000,『広告からよむ女と男　―ジェンダーとセクシュアリティ―』雄山閣出版

⑪伊東良徳，大脇雅子，紙子達子，吉岡睦子　1991,『教科書の中の男女差別』明石書店

⑫Luecke-Aleksa, D., Anderson, D. R., Collins, P. A., and Schmitt, K. L. 1995, "Gender Constancy and Television Viewing," *Developmental Psychology,* Vol. 31, No. 5, pp. 773-780

⑬諸橋泰樹　1993,『雑誌文化の中の女性学』明石書店

⑭村松泰子　1998,「子ども向けメディアをジェンダーの視点から読む」『教育評論』616号，10-15頁

⑮大原由美子　2002,「メディアにおけるジェンダーイデオロギーの再構築と維持」『日本語科学』11号，145-158頁

⑯佐藤毅　1990,『マスコミの受容理論　―言説の異化媒介的変換―』法政大学出版局

⑰Slaby, R. G. and Frey, K. S. 1975, "Development of Gender Constancy and Selective Attention to Same-Sex Models," *Child Development,* Vol. 46, pp.849-856

⑱田中東子　1999,「ジェンダーポリティクスの中のメディアと女性　―ジェンダー構築主義とアクティブオーディエンス論を媒介として―」『早稲田政治公法研究』第61号，335-366頁

⑲上野千鶴子　1995,「差異の政治学」『ジェンダーの社会学』（岩波講座　現代社会学11）岩波書店，1-26頁